

スマホで旅する地域の歴史 (沖縄県南城市)

1. 背景

何気ない風景が広がる住宅街や商店街。だが、どんな小さな集落にも、そこで脈々と生活を営み、地域の伝統を育んできた多くの先人たちの歴史がある。それは、ただ歩いているだけでは見えてこないが、地域の人々が歩んできた歴史を”目で見ながら“その町を旅できれば・・・。そんな旅ナカのコンテンツを提供する取り組みが今年4月から、沖縄県南部の南城市で始まっている。

那覇市から車で約30分。南城市は、琉球王国の聖地である世界遺産「斎場御嶽」をはじめ、琉球の歴史はこの島から始まったと伝えられている久高島、知念城跡、糸数城跡など全国に誇るべき貴重な文化財を抱える。だが、そのアクセスの良さから、レンタカーで世界遺産など有名観光地にピンポイントで立ち寄り日帰り客も多く、市内に点在する他の観光地を回遊してもらえる仕組みづくりが課題だった。また市内には新興住宅地も多く、若い世代が増える中、琉球発祥から脈々と受け継いできた地域の伝統をどう継承していくのかも課題の一つ。その解決の第一歩が「見えないものを見る」新しい観光スタイル「アーカイブツーリズム」だ。

2. 事業の概要

■「見えないものを見る」アーカイブツーリズムとは

多くの観光地を抱える南城市だが、「アーカイブツーリズム」はその周囲にある、ごく普通の集落を拠点に始まる。

到着した観光客は、まず公民館や掲示板に貼られたポスターやステッカー（令和3年10月現在で3エリア6地区）を探し出す。そして、スマホで、ポスターに書かれたQRコードを読み取れば、ツアーの準備完了だ。スマホの位置情報を使って、その地区の地図と「ポイント」が表示される。旅行者は、ポイントラリーの要領で、その「ポイント」を探して歩き、クリックすると、その場所にゆかりのある古写真が表示される。今の風景に身を置きつつ、戦前・戦後など、かつての「その場所」の写真を重ね合わせて楽しむのが醍醐味だ。



加えて、写真にまつわるエピソードが3か国語音声（日本語・英語・中国語）で流れてくる。その内容は、観光地にありがちな形式的な説明文ではなく、思わず笑ってしまうような地域の人たちのエピソードを基にしているのが特徴だ。

筆者は津波古（つはこ）地区のごく普通の住宅街の通りで、スマホ片

手に QR コードをパチリ。今は分譲マンションが建設中の場所には、かつて集落唯一の映画館があったそうだ。地元のお年寄りのエピソードが添えられる。当時は入場料も高価で、高嶺の花だった映画館。料金窓口の大人に見えないよう、入場口の衝立を使って、身をかがめながら、見えないように、こっそりと忍び込んで映画を見た子供の頃の思い出・・・「実は大人たちもそれに気づいていて、わざと見逃していたのかも」という大らかな時代の話に思わず、くすっとくる。

住宅やアパートが並ぶごく日常の風景。普通の観光なら、早足で通り過ぎてしまう集落の「隠れた歴史」を知り、「見えないものを見る」ちょっとお得な気分になれる。

「暮らしの中の一つ一つが積み重なって今があるということ、地元の人たちの素朴な思い出話やエピソードから体験して頂けたらなと。」(南城市教育委員会 新垣 瑛土さん)

そして実は、この写真の収集方法に事業のポイントがあるという。市の呼びかけで地域住民が所蔵している写真を持ち寄ってもらい、データベース化しているのだ。

■住民とともに作る

「行政側から一方的に観光地の情報をただ発信するというだけでなく、地域の方々と一緒に作っていくところに、こだわりがあります。(南城市教育委員会 新垣さん)」

ただ写真を住民から集めてくるだけではない。市はこのデータベースを作るため、平成26年(2014年)から、各集落の公民館やホールで住民が持ち寄った古写真を囲んでおしゃべりする「古写真トークイベント」を開いてきた。写真を1枚1枚、大画面に映し出し、住民から写真にまつわるエピソードを掘り起こしていく。

これまで24か所(全71自治会)で実施し、住民から集めた古写真は約3000枚以上。画面には戦後すぐの白黒写真。嬉しそうにかつての少年少女時代の自分を指さしながら、当時の思い出を語る地元のお年寄り。それらが貴重なエピソードとして一枚一枚の写真に添えられ、先ほどの「映画館」エピソードのように、観光客が各ポイントで巡り合う古写真の「味付け」となる。今回の取り組み、市が大切にしたのは、地域の隠れた歴史を住民と一緒に再発見していくことだった。

■地域課題の解決

南城市内にある世界遺産「斎場御嶽」と市内5つの国指定史跡のグスク(城)は強い観光コンテンツだが、市内には博物館や資料館などの集客施設、いわゆる「ハコモノ」はない。そこで展示施設がないことを逆手にとって、市は平成28年度(2016年度)に「市内全体がミュージアム」という「南城型エコミュージアム構想」を打ち立てた。市内全体を博物館や資料館と見立て、観光客に市内を回遊してもらう・・・アーカイブツーリズムは、この回遊を促す仕組みの一つだ。

また、この「南城アーカイブツーリズム」には、住民自身が古写真を提供しているが、今、このツーリズムを主に楽しんでいるのも、他ならぬ地元住民である点も特徴的だ。比較的、若い世代が増えている南城市で、地域の魅力を改めて発見してもらい、いわゆるシビックプライド(地域に対する住民の誇り)の醸成につながることも期待される。

3. 今後の課題

「アーカイブツーリズム」は今年度中に6地区が加わり、市は最終的に、市全体の3分の1に当たる27地区に広げたい考えだ。今は市内に点在する「アーカイブツーリズム」の適用地域を「線」でつなぎ、観光客の回遊を促す仕組みを市内の観光地を抱えるエリア全体に広げることを目指す。世界遺産「斎場御嶽」に集中する観光客に他の魅力的な文化財や観光地を回って、食事や宿泊をしてもらう……。古写真の「ポイント」をうまく配置し、それぞれの古写真が持つ地域の貴重なエピソードと、琉球王朝発祥の悠久の歴史を合わせて、旅行者がQRコードを追いかけて思い思いに市内を「線」で巡る、いわばオリジナルストーリーを作ってもらえるのが理想だ。

だが、「仕組み」はできても、課題は多い。そもそも「アーカイブツーリズム」の知名度は低く、どうPRしていくのか。また効率的な回遊を促すため、市が取り組んでいるコミュニティバスやオンデマンドバスなどの公共交通と一層連携できるか。宿泊施設や飲食店とどう連携し、収益につなげていくか。市の観光、交通、商工部門や民間事業者が一体となる必要がある。

この点、「南城市アーカイブツーリズム」が観光の直接の担い手ではない教育委員会の主導で、実施されていることは興味深い。市全体の課題である観光振興を観光部門だけが取り組む「縦割り」ではなく、行政職員がそれぞれの立場でやれることを進める……。南城市の今後の取り組みに注目したい。

<おわりに>

今、旅の主流は「旅ナカの体験」がテーマになりつつあります。地域に「暮らすように旅する」スタイル、何気ない地域に入り込んで、普通は見えてこない地域の隠れた歴史を知り、ちょっと得した気分になる……。南城市の取り組みは決して派手ではありませんが、この「新たな旅スタイル」を具現化しつつあると思います。

手元に眠らせているものを掘り起こすことで、地元の人が地域を見直すきっかけとなるとともに、観光客が「何気ない街の日常」を楽しむ有力な「旅ナカ体験」コンテンツとして活用する……。 「ウチには観光資源がない」と悩んでいる地域にとっても大きなヒントが隠れているのではないのでしょうか。

以上

【取材協力先】 南城市教育委員会文化課 新垣 瑛士様
田村 卓也様

【取材日時】 令和3年10月14日

【関連リンク】 「南城アーカイブツーリズム」の使い方

URL : <https://nanjo-archive.jp/feature/306/>

地域振興部事業課 朝倉